

講座 日本語と日本語教育

第1巻 日本語学要説

編集

宮地裕

杉藤美代子

北原保雄

山口佳紀

玉村文郎

武部良明

加藤彰彦

辻村敏樹

崎山理

近藤達夫

寺村秀夫

木村宗男

上野田鶴子

明治書院

講座 日本語と日本語教育

第1巻 日本語学要説

江苏工业学院图书馆
藏书章



明治書院

編者◎宮 地 裕

発行者 明 治 書 院

代表 三 樹 彰

印刷者 大日本法令印刷

代表 田 中 忠

講座
日本語と日本語教育Ⅰ

日本語学要説

定価 二八八四円(本体二八〇〇円)

平成元年 9月25日印刷
平成元年 9月30日発行

発行所 株式会社 明 治 書 院

101 東京都千代田区神田錦町一―一六
電話(292)三七四一(代)振替東京三一四九九一

ISBN4-625-52101-7

製本 星共社

刊行の言葉

言語の研究と教育とは、それぞれ独自の分野であり、それぞれの目的と方法を持つものであるが、一面では、たがいに深くかわりあうものにちがいない。日本語の研究と教育もまた、それぞれ独自でありながら深くかわりあうものである。研究は基礎であって、教育はその応用だと言って済ませられないところがあるように思われる。どの分野でもそうであろうが、とくに言語の研究と教育とは、言語の問題の本質が、人間そのものの、人間の生存や生活や心身のありかた自体に、深く広くかわっているために、相互に格別緊密な関連を持つもののようである。

近年、日本語に焦点を当てた言語の研究が、いわゆる文科系だけでなく、いわゆる理科系の諸方面でもさかんになってきていることは、言うまでもない。それは、科学技術の発達にともなうグローバルな情報交流の展開と無縁ではない。日本語教育も日本の内外で急展開を見せている。少数の外国人が日本語を学習し研究した段

階から見れば、二段階も三段階も進んだところにあると言えるだろう。このたび、教育のうちの日本語教育の分野を取りあげるのはそのためである。歴史もながく、蓄積もおおい国語教育のためにも、よき刺激を与え、参考にもなることを期待している。

日本語研究も日本語教育も細分化が進み、新しい分野と方法がつつぎに開拓されていく。つねに研究・教育の現状を把握し、現在および将来への展望を持つべきわれわれ相互のために役立つような講座でありたいと思う。その道に志を立てたかたがたにも、分かりやすく有益な講座、そして、深い専門性と広い一般性とを兼ね備えた論考の集積として、困難ではあるが本当の意味での概説・概論・要説・要論の講座でありたいという願いもこめて編集に当たった。日本国際教育協会主催、文部大臣認定の「日本語教育能力検定試験」にチャレンジするかたがたの勉強のためにも、本講座はよき伴侶となるにちがいない。

斯界のために、いささかなりとも寄与するところがあれば幸いである。

平成元年三月

編 者

編者の言葉

全体として本講座は、「困難ではあるが本当の意味での概説・概論・要説・要論の講座でありたい」という願いもこめて「いるものだから、この第一巻は概論中の概論、要説中の要説ということになる。きわめて制約された紙幅と精選された項目のなかで、現代日本語学へのよき手引き書、入門書としての役割を果たすことができるよう、執筆者各位にお願いした。もちろん、各分野の権威・中堅・新鋭それぞれに、みずからの視点に立って、その分野を通観しつつ各自の要説を展開されているものであって、各章共通の構成や解説のしかたを持つものではない。各章一つ一つの彫りと色どりを持ちながら、第一巻全体としてのモザイク模様がおぼろげに浮かんでくるようなものであってほしいとひそかに願った。

音声・音韻にかかわる「音声」「アクセント」の二章、単位体構成法という意味での文法にかかわる「語構成」「文構成」の二章、それに加えて文体にかかわる「文章・談話構成と文体」の一章、主として語彙・意味にかかわる「語彙」「語の意味」「文の意味とイントネーション」の三章、文字・表記にかかわる「文字」「表記」の二章、やや広く位相・表現などにかかわる「男性の言葉と女性の言葉」「方言と共通語」「待遇表現」の三章、それに特に照応考究すべき課題を内包する「日本語教育と国語教育」の一章、計一四章は、概略、講座の第二巻から第九巻までの内容、とくにそれぞれの「総説・概説」と対応するとともに、第一一・一二巻『言語学要説(上)(下)』二巻と深く関連するもの

と言ってよい。もとより、他の諸巻とも照応するところの多い基礎論編としての本巻は、独立の要説として利用・活用されるときに、それぞれの分野について、研究・教育の現状・問題点・方法などを明らかにするよう、関連する諸巻の各章を十分参照していただきたいと思う。それによって、従来の「国語要説」「国語学概論」などとはもとより、単著の「日本語要説」「日本語学概説」などとも違う本巻の意味が生かされるだろうと思うからである。

かつて『講座日本語』(全二巻・別巻一、明治書院、昭和五八年完)の編集にかかわった一人としてかえりみれば、その目的や対象範囲の差が、それぞれの第一巻「総論」と「要説」にもあらわれている。前者は日本語の「時代区分」からはじまり、後者は「音声」からはじまる。この「要説」には時代区分や日本語史通論がない。それだけ、現代語に重点がかかり、日本語教育に範囲がひろがっているのである。研究・教育のこの分野での成長の一面とも言えるだろう。大方の利用・活用に資するところのあることを執筆者各位とともに期待したい。

目 次

刊行の言葉	1
編者の言葉	宮地 裕 iii
音 声	山口 幸洋 一
アクセント	早田 輝洋 二六
語構成	野村 雅昭 三〇
文構成	野田 尚史 三六
文章・談話構成と文体	高野 繁男 四六
語 彙	田中 章夫 三〇

語の意味……………	宮地 裕……………	一四
文の意味とイントネーション……………	森山 卓郎……………	一七
文字……………	犬飼 隆……………	一七
表 記……………	佐竹 秀雄……………	二八
男性の言葉と女性の言葉……………	堀井令以知……………	四一
方言と共通語……………	加藤 正信……………	五九
待遇表現―敬語を中心に―……………	菊地 康人……………	七六
日本語教育と国語教育……………	国松 昭……………	三一
執筆者紹介……………		三五

音 声

山口 幸 洋

キーワード

拍の体系 具象と抽象 重用順位 スペクトル 準母音

一 日本人の音韻観念

日本人の音韻観念を代表する「拍（モーラ）」は日本特有の表音文字「かな（ひらがな・かたかな）」によって支えられてきた。「拍」は「音（おん）」と呼ばれ、また、「字数」と呼ばれ、「拍数」は「一字、二字」と呼びならわされてきたことで分かる。外国に比べて能率よく文字が普及したのはやはりそれが日本人の通念に合致したからであろう。

現在部分的に「かな」の体系と現代日本語の音韻体系に見られる「ずれ」（ワを「わ」と「は」等にかきわけする「仮名遣い」のこと）は、「かな」の体系が完成した時代と、その後の音韻の変遷によって生じた宿命である。そのため現代日本語の音韻を語るのに「かな」によるのは最終的には誤りを招く。

1 音 声

しかし、少なくとも日本人は五十音図を基礎としておぼろげながらも拍の種類とその体系を自ら認識しうるのは事実である。それによって日本語の基本的な拍の種類は一〇二、それを清、濁、拗音の

別に分けて、ほぼ二分の一に集約把握することができる。日本人の音韻観念は、その拍を中心にしており、拍から分析される単音（子音、母音）は必ずしも関心になかった。英語国民は子音、母音の認識が日本人より強く、それが音声学で例えば hungry [hʌŋɡrɪ] について h—ʌ—ŋ—g—r—i—i という分析を発達させた基盤となったのである。一般日本人はまず第一に、姿（スガタ）を su-ga-ta とだけ認識する。いや、その su-ga-ta を s—u—g—ʌ—t—i—a と分解する能力がない。その能力は日常必要がない。

日本人が su-ga-ta と分ける分節に匹敵する英語の分節は hungry の場合、hʌŋɡrɪ である。その分節 [su] [ga] [tʌ] を日本語でも s—u—g—ʌ—t—i—a と単音に分析することはできない訳ではないが、日本語はそれに重きをおかない。一方、英語は hʌŋɡrɪ のような分節よりも h—ʌ—ŋ—g—r—i—i と分析することに重きをおく。英語で hʌŋɡrɪ のような分節（音節）の種類は三〇〇〇余もあると言われることから分かるように、その種類とか数は英語の音韻を規制する力として日本語の分節のように重要でない。すなわち、日本語の音韻は単音の結合たる分節を中心にしており総合に優れ、英語のそれは単音を単位とする分析に優れる。意識の持ち方として日本語にとっての単音、英語にとっての分節は、一方を主とすれば従、日本語と英語においては主従が逆である。この違いが日本語の音節すなわち「拍」を考える上できわめて重要である。

日本人の韻律観念の基礎はその拍であり、それがアクセント体系と深く関わる。そして、その拍と民衆に愛された歌とは切っても切れない関係にある。五七五七七の和歌、五七五の俳句、七七七五の俗謡が日本語の言語単位の基礎たる「拍」の観念に育てられ、あるいは育て支えてきたことは想像に

難くない。

二 音節と拍

音節(シラブル)とは、「一回の調音行動にうらづけられた一個の音」をいう音声学的な単位であるが、それが「言語形式を構成する上で」意味を持つかどうかの違いが言語によってある。

英語の音節 [hag] [grɪ] や [straɪk] は、その意味で音声学的な「音節」の概念に合致する「言語上の単位」であるが、英語は前述のように音節よりも更に分析的な「単音」に重点をおく。これに対し日本語の音節 [su] [ga] [ta] も [a] [me] も「一回の調音行動にうらづけられた一個の音」であるが、それだけでなく、そこに別の原理が加わって制御される。それは、音節を構成する基本が、英語において【CVC】(Cは子音、Vは母音)とされているのに比べると、日本語は【CV】だと言われていることに加えて、および、時間的な等質化(等時性)が重要視されているというところにある。【CVC】も【CV】も音節には変わりはないが、そこに等時性がプラスされた概念を「拍(モーラまたはモラ)」という。英語では「拍」がたてられない。日本語のすべての単語は「拍」に立脚して形づくられており、「五十音図」はそれを一覧する。

等時性とは音節 [su] [ga] [ta] [a] [me] のそれぞれ一音が、時間的に等質であることを言う。ただし絶対的ではなく、相対的でもよい。つまり [su] [ga] [ta] それぞれが〇・一秒というように時間的に同一であることが基本であるが、[su] 〇・一、[ga] 〇・〇八、[ta] 〇・〇五のように平均的に早くなっていくぶんにはいくぶん構わない。だが、〇・一—〇・一八—〇・〇八のようにむら

があつては異常であるというようなものである。英語の場合は時間の観点からすると、[haʊ] [gri] [straɪk] がそれぞれ不等質であるというようなことは気にしない。そこで日本語「姿」を英語国民がしばしば [su ga: ta] と発音するケースにみられるような [ga] と [ga:] の区別（母音の長短）を無視する現象が起きる。逆に日本人が英語を日本語化するとき CV 構造にあわせ、かつ等時性を加えることにより、haŋ-gu-ri:, su-to-ri-ku と実現する。この場合、日本語で長音、撥音、促音等を一個の拍とみなすその根拠は時間的な等質性である。

長音、撥音、促音等を一個の拍とする結果、日本語では、音声学的な一個の音節が「拍」（言語としての単位）としては二と言う性質のものが存在する。これを川上素は「長音節」といい、「拍としても一である音節」を「短音節」と言っている。「二拍である一音節」とは、具体的には「甲、用事、相撲」における [ko:・jo:・mo:] 等々の長音、「金」における [kiN]、「とんぼ」における [tom—]、「飲んだ」における [non—] 等々のような撥音、「あっさり」における [as—]、「切った」における [ki:] 等々における促音のほか「貝、赤い、大工」における [kaɪ・dai]、「黒い」における [roɪ] 等々にみられる二重母音、を含むシラブルである。また、「三拍である一音節」もあって、鐘の音「ゴン」の [go:N]、「凍った」における [ko:ɪ]、「そうっと」における [so:ɪ] 等々がある。

この観念は有用であるが、長音節では「長音」と紛らわしいので「複音節」と呼ぶ。あわせて短音節を「単音節」と言い替える。複音節を構成する成分である、二重母音、長音、撥音、促音を、日本語においては特に独立して「拍（モーラ）」を成しうる特殊音素とする見方からして「モーラ音素」ということがある。モーラ音素が独立的な単音節を成しえず、常に複音節の付属成分にとどまるとい

うこと等において特殊であることに変わりはない。なお、等時的な意味においても特殊で、たとえば「赤い、用事、とんぼ、切った」等々におけるモーラ音素モーラの時間はかなり観念的なもので、前後のモーラに比して必ずしも厳格な等時性を要求されない。観念的には等分の時間が必要とされる（丁寧な発音では実現する）が、現実には例えば「赤い」が [a] ○・一二、[ka] ○・一二、[i] ○・〇八であつても無理でない。

ところで柴田武^{註2}によると日本語方言の中に「すべての音節」イコール「拍」としている方言、すなわち「複音節」と「単音節」を分別しえない方言があると考えられている。これがシラビーム方言で、シラビームとはこの場合、「拍」とイコールであるところの「音節（シラブル）」を言っている。これに対するモーラ方言は、「拍」をたてうるもの、それが必要なものである。

シラビーム方言は東北方言、北陸方言、出雲方言、南九州方言がそれと考えられているが、最近、モーラ方言と考えられている標準日本語の中にもシラビーム方言的傾向が混在していることが分かってきて、必ずしもきれいに割り切れないようである。そして現在シラビーム方言とモーラ方言の差は、アクセントの上で顕現するという程度の差であると考えられている。示唆的であるが、なお考察を進める余地が残された説である。

音韻とは、文字で表しえ、文字を必要とすることでうらづけされるとおり、語彙、文法形式を作る単位つまり言語として意味をもつ音声である。日本語のそれは、音節が音声学の実体であるのに対し「拍」は音韻論的単位であるが、この音韻論的観念が日本語の音声を把握する上で必要なのである。

三 音声の抽象レベル

その音声について、人間の発音は常に一定でないという考え方があつた。事実、音響としての発音はこまかくいえば、男声、女声、子供の声、成人の声、老人の声、太い声、細い声、高い声、低い声、すぎ通つた声、だみ声、明るい声、陰気な声、はりきつた声、申しわけなさそうな声、すべて違ふこととは誰にも分かる。日本人、外国人を問わない。厳密にいうと、同一人でも発話ごとに異なる音声を発していることになる。音声学書は、そのたびに同じ「ア」でも「ア」が違つたと説く。この説を延長すると、人間の顔が一人一人異なるように人間の発音器官（鼻腔、唇、歯、歯ぐき、硬口蓋、軟口蓋、舌……）の形状はすべて異なるのだから、それを通して実現する人間の現実の音声は、一回として同じものではなく無限に異なる。しかしこれでは「話（学問）」としてきりのない話であり、話の目的に依じて「枠」を設けるべきであらう。それは「日本語の」話の上では無用のこと、言語以前の問題であり、「音声」というより「音色」あるいは「音響」といっておくべきである。「音声」はそれを超えるものでなければならない。

音声とこれに対する「音韻」の関係を具象と抽象の関係で把握するのが一般的だが、その具象的事実「音声」自体けつして一元的に割り切れず、相対的に幾重にも分割しうる観念的なものである。具體的にいうと、近年発達した音響的スペクトログラフは、一見音声の実態を精密な図形に写すようであるが、図形はあくまで図形でしかなく、肉声の音声事実を限度のある「点」または「線」で絵にしているにすぎない。録音にしたところで精度の良し悪しはどこまでもつきまとうから、限りなく具象

に近づけようとすれば、ある個人の一回の発音を目前にするしかないのである。何かに「写す（移す）」時点ですでに抽象化が始まる。それを録音し、画面に写しだし、グラフを印刷し、それをもとに略図を描き、精密音声表記に書き、簡略表記化するのとは、つまり具象から抽象へのレベルを高めているということである。また、発音は一回ごとにすべて異なるとは音声学者のよく言うことだが、その音声学が好んで使うスペクトログラフは、実はある個人の一回の発声である。サンプルであるといえるが、それが日本語の規範であり標準である保証はない。

「日本語の」話をする上で無用の音声事実はまだある。ある意味では音声は常にあらゆる言語的意味を反映しているといえる。我々は時に、本屋にある種の本があるかどうかを探させて返事を待つとき、やがて店からかかった電話の第一声「〇〇さんですか」で即座に「ある」のか「ない」のかを理解できることがある。その音声の特徴は何であろうか。また、友人からの電話をつげる妻の「電話よ」の一声でそれが悪友からのものか、善友（？）からのかを察することが出来たりする。「電話よ」の場合は妻の同じ「デ」でも語気鋭いデか、穏やかなデかによってピンと来ているのである。それは音声学的には語気鋭い方は「^{注3}che」、穏やかな方は「^{注3}de」と表記されえ、ここに明らかに「意味」を看取することができるといえるわけだけでも、「意味」自体すいぶん広い意味を持っている。

言語上弁別の意味とは、同じ「感情を反映」しながらもそれが「別の語」を表しうる音声であるときいふもので、それを言語的意味という。

これに対し、「同じ語」を表しながらそれによって感情を反映するような意味は表情的意味であり、この場合言語的意味とは定義しない。言語として無意味な音声とはこの場合、言語上弁別に用しない

意味だということであり、「電話」に即していうと、[dheũ wa] も [deũ wa] も「電話」でしかないから、[dhe] も [de] も「デ」でしかなく、[dhe] と [de] の差は非言語的意味の差だといえ、同じ「拍」である。

「拍」を構成する音声単位を「音素」という。「デ」でいうと、子音/d/と母音/e/である。むつかしくいうと「拍」から分析して得られる音声上の単位概念ということになる。これを「音韻」ということもできるが、「拍」もすでに音韻観念の所産である。

抽象はそれぞれの目的に応じて必要とされよう。いま日本語教育でいう「日本語の」というときの「音声」はどのレベルでの「音声」をいうかと考えてみると、日本語という言語体系を形作るために必要な要素である「拍」を構成する成分たる「音素」に対応する、最低のレベルでそれは満たされると思う。音韻に対応する最低のレベルとは、「音声」の範疇では最高のレベルということである。すなわち、個人差・音色・表情を捨象した社会的習慣としての「音声」である。

四 音声スペクトルの効用

たとえば日本語の母音/u/の音声[w]の実質について音響スペクトルや生理学的に口腔の形態を詳しく論ずるのは、実験音声学あるいは音声生理学、さらに電子工学の分野であり、「話すロボット」や「音声タイプライター」の制作側の重大な関心の的である。橋本万太郎^{注4}によると、諸言語で保有される音韻の数と種類は、音特性を反映するフォルマントを通してそれぞれバランスよく対立しあっていることがわかったという。その研究のもたらす成果として、言語構造の原理の追及に寄与する